

第十三節 各民族の關係

新疆は多數種族の混住する爲め、其の同族同宗間の團結心極めて鞏固なると同時に、他種族他信者に對しては、動もすれば猜疑心を挟み、互に反目疾視するの狀なき能はず。甚だしきに至ては、相敵國視するに至る。

滿人、漢人の回民を待つや、常に夷狄を以てし、謀叛者を以てす。隨て回民は、衷心不快の感に堪へず。同族相團結して、滿漢人に當らんとするの狀あるは、已むを得ざるの勢なり。

官尊民卑の甚しき清國に在りて、其の人民の官吏たることを企望するは、當然の結果なり。而も各種族の官を得んとするに滿人は最も容易にして。次は漢人次は蒙古族次は漢回の順序にして、纏頭回、哈薩克等に至りては、單に自治體の名譽職たるを得るの外、官吏たるの權利を附與せられず。惟ふに漢回中、或は狡獪なる者多からん、彼等の歴史が、叛亂を以て充たされ在るを觀ても知るべきなり。然れども、是れ自動的なるか、將た他動的なるかは疑問なり。